

エンパワメントってなんだろう

セミナーで、エンパワメントについて^{けいけん}経験しました。

それは、^{つぎ}次の4つのことです。

- ① ^しみんなのことを知る
- ② ^{じぶん}自分のことを^{はな}話す
- ③ ^{そうだん}みんなに相談して^{ちから}力になってもらう
- ④ ^{しょうがい}障害のある人も^{ひと}ない人も^{ひと}一緒に^{いっしょ}^{きょうりよく}協力する

みなさんには、こういう^{きかい}機会がありますか。



インフォメーション

この新聞のことについて、もっと詳しく知りたい人は…

めいじがくいんだいがくしゃかいがくぶしゃかいふくしがつか なかのとしこけんきゅうしつ
明治学院大学社会学部社会福祉学科 中野敏子研究室 (ファックス 03-5421-5558)

までご連絡ください。また、読んだ感想なども教えてください。

このセミナーについての詳しい内容は…

こうせいろうどうかがくけんきゅうひほじょきん しょうがいほけんふくしそごうけんきゅうじぎょう しょうがいとうじしゃさんか
厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究事業『障害当事者参加型

のプログラム開発に関する研究』(主任研究者 中野敏子)に書いてあります

(ふりがなはありません)

にほんでもスウィンドンと同じように、ピープルファーストのグループがあります。

日本のピープルファースト活動については…

とくていひえいりかつどうほうじん ピープルファースト 東京

〒191-0041 東京都日野市三沢1-28-5 三沢ビル1F

でんわ・ファックス 042-599-2667

でんし 電子メール p1st@cocoa.freemail.ne.jp

この新聞づくりに協力してくれたみなさん

めだかふあみりい (埼玉県川口市でクッキーや木の製品をつくっている団体) で活動され

ているみなさん

はたがやゆうすくらぶガヤ (東京都渋谷区青年教室) で活動されているみなさん

ピープルファースト東京 (東京都日野市) のみなさん

みんなのわ (東京都立川市の本人活動グループ) のみなさん

IV. 分担研究報告：精神障害当事者参加型調査研究による
福祉サービス運営・評価のプログラム開発研究

IV 分担研究報告：精神障害当事者参加型調査研究による福祉サービス運営・評価のプログラム開発研究

第1章 クラブハウス利用をめぐるの当事者の当事者による聞き取り調査（アクションリサーチ）から当事者のサービス運営・評価活動について

1. はじめに

平成14年度の本研究報告書の中で世界クラブハウス連盟運営規約の紹介を行った。その規約に沿って、クラブハウスに通う数人に声をかけ、次のような問いかけを行った¹⁾。

あなたはクラブハウスサービスを利用していますが、見学者や新しく参加希望者が見えたときに、どのようにクラブハウスサービスを説明していますか？たとえば絶対に伝えようと思うサービスにはどんなものがありますか？また当事者と支援者が協働でサービス運営・評価プログラムに参加するために、クラブハウスサービスの利用者に確認したい事は何ですか？

上記のような問いかけに答えていただいたことを基に調査項目案をクラブハウスサービス利用者である当事者に提示したことから、クラブハウスでは支援者やボランティアを含む活動の振り返りが行われた。クラブハウスの哲学であるパートナーシップ、相互支援、できるところからのスタート等が実際に行われているかどうかを当事者が当事者に質問していく方法で調査に臨んだものである。この調査から期待できる成果として、

- ① 当事者同士の仲間意識や当事者同士だから話せる内容があり、サービス運営や評価に積極的にかかわることで当事者によるサービスの改善や新たなサービスを創造していく資料を提供できる。
- ② 当事者の主体的な活動を通してオブザーバーである支援者が当事者から力と勇気を与えられ、バーンアウト防止の期待がもてる。
- ③ 当事者と支援者の関係がよくなり、運営や評価に相互支援が生かされると想定できる。
- ④ これらを明らかにするために、下記の方法と対象、調査項目、調査のための前準備、コンサルテーションのための準備における一連のプロセスから分析報告していくこととする。

2. インタビュー調査の方法と対象

(1) 調査の目的

クラブハウスは当事者参加型の地域支援サービスのひとつである。クラブハウスモデルとして支援者と当事者のパートナーシップのもとに仲間と分かち合い、相互支援で活動運営・評価していくことが重視されており、今回の調査はクラブハウスモデルに従って運営

されている団体の実態を把握するためである。

(2) 聞き取り調査の対象

調査の対象は、精神に障害を持つ者で、クラブハウスモデルに着目して運営されている団体に所属し活動に参加されている当事者である。また調査は、

- ① 国際運営基準で認可されているクラブハウス1ヶ所である²。
- ② クラブハウスモデルを活動の一部に取り入れ、近い将来にクラブハウスの認定を希望されているセンター³。
- ③ 現在は共同作業所であるが、将来的にはクラブハウスを希望されている⁴。

の3分類とした。すでにクラブハウスモデルで活動している施設と、将来構想にクラブハウスモデルを検討している施設とでは、当事者と支援者間の意識や理解度に変化がみられるのではないかと推測したためである。

(3) 調査の方法

2003年10月～11月に直接現場へ出向き、当事者が当事者に聞き取るという方法で行い支援者はオブザーバーに徹した。

(4) 調査項目内容

クラブハウス運営規約に沿って、当事者体験を重視した内容で、自分たちの言葉で調査項目を作成し9項目約70の質問からなっている。1 はじめにの太字の部分が当事者に投げかけた内容である。項目内容は①ユニット活動（クラブハウス内の役割分担）について②就労プログラムについて③メンバーとスタッフの関係について④特別プログラム（レクリエーションや教育・研修活動）について⑤国際交流について⑥全体について⑦アウトリーチ（友愛訪問）について⑧住居プログラムについて⑨その他自由にとりという構成になっている⁵。

3. 調査に入る前の準備（評価する側）とコンサルテーション（評価される側）に向けての準備

(1) 調査に入る前の準備（評価する側）のための経過

①調査準備会議を立ち上げる。当事者の当事者による1時間程度の聞き取り調査を行うために調査協力員を募集した。調査協力員を中心に10月6日の京都調査に向け12回、10月24日の仙台調査に向け8回、11月7日の奈良調査に向け6回、計26回の会議を持った⁶。

②聞き取り調査の依頼先選出方法も当事者とのパートナーシップで選択し、希望調査地候補に手紙や電話で確認を取り付けて了解を得た調査先について上記の聞き取り調査対象①②③に分類した。

③調査項目は上記の通りである。調査協力員は、調査項目に沿って身近な仲間との相互のインタビューを繰り返し、調査項目の内容検討を行った。調査項目は自分たちの活動を振り返り、自分たちの言葉で作成した。

④調査を円滑に行うために、パートナーシップとして相手への配慮を重視した。従って一方的な調査にならないように、事前にパンフレット等を取り寄せ、調査に協力してくれる施設の歴史や業務の概要、近在の環境（観光名所）等を調べ、読みあわせを行ってから現地へ赴いた。

⑤学習会では、資料の読み合わせをしながら、「クラブハウスモデルとは？」の理解を深めることとした。特にクラブハウスの特徴的用語であるパートナーシップ、過渡的雇用、アウトリーチサービス、諮問委員会、フォーラム等の学習も行った。

⑥予行演習をおこなうことで、不安や緊張を緩和させ、当事者が自信を持って調査に出かける準備と受け止め、ここでは面接のロールプレイやフローチャートを何度も練習した⁷。

⑦調査に出かける直前の準備に用意するものでチェックリストを用意した⁸。

（２）コンサルテーション（評価される側）への経過

今回のコンサルテーションは、クラブハウス サン・マリーナが開設して２度目のクラブハウス国際認証のための評価であった。クラブハウス連盟規約をどの程度満たしているかを４日間に渡って詳細に調査する作業に、国際クラブハウス開発センター・プログラム開発部長ラルフ・ビルビー氏と国際クラブハウス連盟メンバー・サービスコーディネーター デニス・ハースト氏のパートナーシップで行われた⁹。

今回のこの調査が「評価を行う側」から「評価を受ける側」にまわることで緊張も高まっていたが、調査準備会議を設置したことで、本調査の振り返り持つことで、改めてクラブハウス運営プログラムを学習するチャンスが与えられ、コンサルテーションへの準備となった¹⁰。

①調査準備会議で、調査後は本格的なコンサルテーションを受ける側として、２回の打ち合わせ会議を持つと同時に、コンサルテーション４日間は連日会議を持った。

②ユニット活動の振り返りでは、教育研修、相談訪問援助、雇用、受付、事務、喫茶、食事等の各ユニット毎に、役割分担やパートナーシップを通じた日頃の活動を振り返った。

③その結果、クラブハウス全体の振り返りができ、クラブハウスの特徴と目的が再確認された。それは、i、自分の意思でメンバーになること。ii、すべての活動に平等に参加する権利を有する。iii、メンバーとスタッフの協働運営であること。iv、運営プログラム活動の決定は公開された会議で行う。v、独自の諮問委員を持つ¹¹。などである。

4. 調査の分析

1) 分類①「メンバーとスタッフ関係は対等ですか？」という質問に、「対等とは言いがたい、プログラム負担がスタッフの方に重くかかっているようだ」と答えると、調査員も自分もそうだとわれ、お互いメンバーががんばらねばならないと話し合いました。東京と奈良と離れていても同じクラブハウスということで共通の目的があることを確認でき、楽しい時間が持てた。途中で休憩を取る約束をしていたが休憩のことなどまったく忘れてしまった。」という当事者の感想から、当事者が当事者に問い掛ける今回の調査は当事者同士の活動の体験を共有でき、エンパワメントし合えたことが理解できる。またこの一連の調

査状況を見守っていた支援者は、「インタビューを受ける側も受けられる側も自分の施設についての意見をじっくりと考える、そして共感する機会があり、インタビュー後の生きいきした表情が印象に残っています。」と当事者参加への高い期待をもって結ばれている¹²。

2) 分類②では、一部クラブハウスモデルが活用されているものの、最も特徴を示す雇用支援においては独自のプログラムというよりは雇用行政の持つ事業と併用した形で展開されていた。社会資源の少ない地域では、クラブハウスがサービスの完結ではなくマネジメントモデルであることを証明しており、その地域独自のプログラム開発が芽生えているといえる。従って「大学に行って講義に参加できるプログラムができることを期待する。」「健康な人ばかりとは限らない、いろいろな人との出会いの受け皿にクラブハウスがあるといい。」とインタビューで答えてくれた当事者の夢に答える創造的なプログラム開発が待たれる。当事者の声を反映させていくプログラム開発を行う素地が充分に感じられた。ある当事者は、自由質問において「障害を他者に知られようがかまわない、入院も心休めに行くところだと思って私から先生にお願いして短期の入院をすることがありますよ。」それを受けて調査員は「うまく病院を利用されているんですね。前向きでいいですね。われわれの病気は何か事ある毎に問題にされるので、引っ込んでいては何の解決にもなりませんからね。」と、当事者同士でしかできない共通の体験を基にした支援が見られた¹³。

3) 分類③では、交流会に時間をかけボランティアの方々も参加される中で共に一緒に作り上げようという意欲が感じられた。ある当事者は、「福祉手帳を申請したときに、その窓口の人にジョイント・ほっとを紹介してもらった。いくつか考えていたけれど、すでに開設されている作業所は内作業が多く、あまり気乗りしなかった。ここは喫茶ということではまだはっきりとした作業が決まっていなかったので、余計に興味を持った。」と述べられているように、一緒に作り上げたい、当事者が主体的にかかわりたいという希望が見えるものである。「5月に現在の地に移転してきて、バタバタしていて力が萎えていたところに、クラブハウスの話を聴いたりビデオを観たりしていくうちに、やっぱりクラブハウスを作りたいと今むくむくとした想いが湧いています。」といった支援者は、エンパワメントされたことで新しい意欲を持って運営活動に取り組めるといった当事者から学ぶ姿勢が確認できたし、調査員は、「調査にきて心と心がくっつくと思った」という感想に情報の共有化が高められたことを確認できた¹⁴。

4) 60代の当事者が「わたしはこれからあたふたと仕事をする気持ちはないけれど、自分が挑戦することで若い人が後に続いてきてくれるのではないかと思うからがんばれる。若い人たちはあの年寄りができるなら自分も挑戦できると思ってくれるかもしれない。」という考えを伝えられると、40代の当事者は「違った職業に挑戦するのはすごいと思う。これも相互支援だよ。次の人へバトンタッチするのが過渡的雇用だから。一般就労でも大事にする協働をクラブハウスは身を持って体験できる。」と自分の考えを伝えてくれた。体験に無駄なものはないし、がんばれる目的と少しの勇気があって、機会さえあればできることをお互いの体験から示唆してくれている¹⁵。

5. 当事者参加型のモデルプログラム開発の考察と課題

(1) 調査の考察

今回の調査は、プレテストを仲間内で行い、調査項目を修正しながら取り組んだ一連の過程そのものが、当事者参加型の福祉サービス運営・評価プログラム開発であったといえよう。クラブハウスモデルを広く日本の風土に浸透させたい、コンサルテーションを控えこの調査を準備として受け止め、交流の意義を確認しあえたクラブハウスサン・マリーナの当事者と支援者の協働作業の賜物であったといえる。

3 分類の調査を行ったことで、クラブハウス理解への温度差をどうすれば小さくできるかが最大の課題であったが、事前に質問項目を送り、調査に余計な負担を掛けないような配慮を行ったことや、ビデオ鑑賞に始まり言葉の説明に重点を置く情報提供のあり方に工夫を凝らしたり、事前学習で説明のスキルアップを行ったことが有効となったと思われる。

「交流会や懇親会に多くの時間を割いたのは、緊張感の緩和になりますね。交流会は調査員と調査に協力してくれる人とのお見合いの時間だから最後に誰と話し合うかをお互いで決めるといいですね。自分の癖を知ることにもなります。」といった実際の調査をうまく乗り切るための他者との折り合いをつけるという環境調整を学習したのである¹⁶。

更に今回の調査がもたらした効果に、支援者もまた当事者から支えられたということに気づく。調査に当たる当事者と支援者の間に真のパートナーシップが芽生え、一緒に作業をしている充実感を味わうこととなる。支援者だからしっかりリードしなければと自分に言い聞かせるより、「一緒にやろう手伝ってね」の関係がバーンアウトを防止しているといえる。

以上のことから今回の調査で明らかになったことは、通常の活動の中に当事者が主体的にサービス運営・評価にかかわることで支援者とのパートナーシップによい関係をもたらし、地域生活を営む住民との間に十分に生かされると確信する。従って今後も当事者参加型のサービス運営・評価プログラム開発に取り組んでいくことが重要であるといえる。

(2) 今後の課題

2003 年 5 月に厚生労働省は、精神障害者の保健医療福祉サービスを図るための重点施策に①普及啓発②精神医療改革③地域生活支援（住居・雇用・相談支援）を柱に、受け入れ条件が整えば退院可能な 72,000 人を地域で暮らせるようにするという報告書を提示し、その中に精神障害者の自立支援サービスのひとつにクラブハウスモデルを登場させている。更に 2004 年 3 月には、①の普及啓発が「こころのバリアフリー宣言」として、精神を正しく理解し新しい一歩を踏み出すための指針を二部構成 8 項目で報告している。

ここでは自分自身の健康管理や健康理解の有無と同時に、地域住民が障害をもつ者を正しく理解し支援していくか、そして障害をもつ者が地域社会に積極的に参画していくことが重要であるとまとめられている。個人とそれを取り巻く環境調整が十分に折り合っていけば共に地域で暮らせるはずである。

しかしながら、その前提には自分の希望や感じたことを伝えるコミュニケーションスキルやセルフヘルプの力を獲得することがより重要といえる。今回の調査協力員は、クラブハウスの哲学である相互支援やパートナーシップを一人一人が自分の意向を伝えるスキル獲得を目標に 10 年ほど前から学習してきた実績がある。これは自分のニーズに適したサービスを選択し、自分の責任においてサービスを決定するという学習でもある¹⁷。

14 年度の本研究報告書でミシガン大学の教育支援プログラム開発に、地域のクラブハウスと協力しあった取り組みの効果が紹介された。今回の調査からも明らかのように学習と

実践が一体となって効果を発揮するということが実証できたといえる。ピア（仲間）による説明や情報提供が効果的に働いたことから、世界のクラブハウスで行われている教育支援プログラムをピアカウンセリングセミナー等と併せて取り入れていく基礎的データがもたらされたといえる¹⁸。

更に今回の調査項目は、聞き取り調査ということで当事者の言葉を反映し丁寧に作成されているため、通常の活動で利用するには時間や調査員不足で十分なものとはいえない。各当事者がクラブハウスモデル運営活動のプログラム評価や参画の有様、サービス評価を行ったり、自分自身の振り返りを行う自己チェックリストや仲間チェックできるサービス評価へと改める作業が今後は必要と思われる。

障害を自分のこととして正しく理解するのに評価は必要であり、相互支援はこれからの社会生活に欠かせないものであるから、サービス評価開発プログラムの改善を今後も継続していくこととしたい。

1 社会福祉法人 JHC 板橋会クラブハウス サン・マリーナ 東京都板橋区上板橋 2-31-13 1992 年開設 サン・マリーナはわが国最初の国際連盟規約で認可されたクラブハウスである。板橋区の委託事業として補助金で運営がまかなわれている。2003 年には国際連盟規約に沿った 5 年毎の評価（コンサルテーション）を受けることになっていたこともあり、今回のインタビュー調査に協力を頂いた。

2 社会福祉法人寧楽ゆいの会 ピアステーションゆう 奈良県奈良市大宮 3-5-35 1996 年開設 ピアステーションゆうは 1991 年に設立された「サロンやすらぎ」共同作業所が母体である。日本クラブハウス友の会の関西支部事務局となっている。2003 年にクラブハウスに認可された。

3 社会福祉法人ふれあいの森 地域生活支援センター 向日葵ライフサポートセンター 宮城県仙台市太白区袋原 5-17-33 1999 年開設 早くからピアカウンセリングに関心を持ち、当事者と支援者でサン・マリーナ主催の学習会に参加されたことを契機に現在は学習会を独自にスタート。今回調査に協力された当事者はこの学習会の受講生で仙台市内の他作業所の利用者や地域生活支援センターの非常勤として働く当事者も含まれている。

4 NPO 法人てりてりかんぱにい共同作業所 ジョイント・ほっと 京都市下京区寺町通仏光寺下ル恵比須之町 534 1997 年開設 喫茶・洗濯・事務・渉外・製菓の 5 つのユニットで、当事者はその日の体調に合わせて各ユニットの活動に参加している。

5 資料 1 聞き取り調査用紙、調査風景写真

6 資料 3 調査準備会議写真参照

JHC 板橋会 風見鶏 27 号

7 資料 2 調査の進め方

8 資料 3 調査の準備

9 JHC 板橋会 風見鶏 28 号

10 障害がある人びとの地域生活支援のための国際フォーラム 2003 において基調講演「米国におけるファウンテンハウスを中心とした地域生活支援の最新動向」～クラブハウスでの“私たちはひとりぼっちじゃない” 30 年のあゆみ～と題してビルビー氏が講演を、シンポジウム「どう創りだす、孤立からの解放 どう極めあう、本物の地域生活」～我が実践の理念と実際、交流の中から明日をさぐる～で JHC 板橋会 サン・マリーナや奈良寧楽の会 ピア・ステーションゆうのクラブハウスで当事者と支援者のパートナーシップによる報告が行われた。2003,11,19（於：兵庫県民会館）2003,11,21（於：東京 センチュリーホール）

11 諮問委員会の委員は、クラブハウス運営に貢献する者すべてを指し、その構成員は当事

者、支援者、運営母体の理事、住民、ボランティア、企業家など多彩な顔ぶれからなる。

12 マインドなら (No77) 通巻 4267 号 2003,12,1 発行

13 調査のテープ起しから 2003,10,24 仙台ふれあいの森

14 調査のテープ起しから 2003,10,6 京都ジョイント・ほっと

15 調査会議のテープ起しから 2003,10,20 東京サン・マリーナ

16 同上

精神科リハビリテーション W.アンソニー・M.コーエン・M.ファーカス **マイン
1993**

17 SST (社会生活技能訓練) やピアカウンセリングの学習

18 調査期間中に訪問したクラブハウス Stepping Stone Clubhouse BRISBANE
Bromham Place Clubhouse MELBOURNE では大学の講義に障害者が参加し
やすいような配慮がされていた。

章 末 資 料 3

1. 障害当事者参加型の福祉サービス運営・評価のプログラム開発に関する研究

クラブハウスモデルを対象として

☞ クラブハウスとは：

クラブハウスは、自助活動から生まれました。1940年代、ニューヨークの州立精神病院の退院者たちが、「私たちはひとりぼっちじゃない」を合言葉に、地域で自助活動を始めました。その後、援助者やボランティアなどとパートナーシップ（対等で相互に助け合う関係）のもとに、ファウンテンハウスというクラブハウスを生み出しました。

したがって、「ひとりぼっちにならない、させない」という自助グループの理念が、クラブハウスには引き継がれています。つまり、仲間と分かち合ったり、相互に援助しあうことに最も価値を置いています。それと同時に、教育、住まい、雇用、社交・娯楽などは、社会人として当然享受する権利があるものとして、協働してそうした課題に挑戦しています。特に、過渡的雇用というクラブハウス独自の就労支援システムが、日本でも注目されつつあります。

☞ 聞き取り調査の目的

クラブハウスは、当事者参加型の地域支援サービスのひとつといえます。日本では、1980年代後半から、小規模作業所活動にクラブハウスモデルの部分的導入という形で広がり始めました。

当事者参加型というのは、メンバーが主体的に活動に関わるだけでなく、自分たちに必要なサービスを自分たちで創りあげていくことでもあります。

クラブハウスモデル以外にも、自立生活センターなどピアカウンセリングや訪問活動を中心としたサービスモデルがありますが、今回の調査では、クラブハウスモデルを中心にお尋ねします。

この調査を実施するにあたって、まず、クラブハウス サン・マリーナのメンバーが自分たちの活動を振り返って、自分たちの言葉で調査項目を作成しました。

次に、調査をお願いしている団体の活動について、パンフレットやニュースをいただき、読み合わせをしました。そして、自分たちと共通の活動は何か、あるいはサン・マリーナにはない独自の活動は何かについて学びました。

これから、(調査している施設名)の皆さんの活動の実際を見せていただき、メンバーの皆さんにインタビューをして、お互いの経験の交流をさせていただきます。

それを報告にまとめ、今クラブハウスを運営している人たちと、これからクラブハウスを立ち上げようとしている人たちの参考になればと願っております。

《最初に確認したいこと》

- 1) 調査にご協力いただいた方のお名前と所属を記入させていただきます。

お名前：

ご所属：全ての所属先をお願いします。

- 2) 調査の報告書は、本名でいいですか、匿名にしますか。

本名：

匿名希望 ①イニシャル：

②ペンネーム：

- 3) 写真をとってもいいですか。

はい

いいえ

- 4) 休憩をいつ頃いれますか。

大体 _____ 分頃

休憩を入れて、1時間以内で終わります。

それでは、質問を始めます。

(:)

質問1 クラブハウスの日常活動としてのユニット活動（ハウス内の役割分担）について：

クラブハウスでは、自分たちの相互支援の拠点として、自分たちに必要な活動を分かち合うために、ユニット活動があります。

サン・マリナーでは、ミーティングの司会や書記、受付、電話応対、見学案内、ニュースの発行、清掃、喫茶・ランチサービス、友愛訪問活動、図書整理などの仕事を分かち合っています。

- [] あなたの施設での1日の過ごし方を教えてください。
- [] どのユニットに参加していますか。
- [] 参加しているユニットでの活動内容を教えてください。
- [] なぜ、そのユニットを選びましたか。
- [] 毎回、自分が活動できる機会が、充分ありますか。
- [] 自分で、自由に選んで活動していますか。
- [] パートナーとして、どなたと一緒に活動されていますか。

(:)

質問2 一般の会社での仕事について：

一般企業で働くことも、クラブハウスのメンバーの目標のひとつです。

そして、過渡的雇用は、一般就労への橋渡しの方法です。

過渡的雇用と一般就労（パート・アルバイトを含む）についてお尋ねします。

- [] 過渡的雇用に参加していますか。
- 「はい」と答えた場合：
- [] どのような仕事ですか。仕事内容を教えてください。
 - [] 一週間の勤務日数と1日の時間を教えてください。
 - [] ジョブコーチと一緒に参加してくれますか。
 - [] 体験期間はどのくらいですか。たとえば6ヶ月とか、9ヶ月とか。
 - [] 事業所に穴を開けてはいけないうち組になっていますが、休む時は誰が代わりにピンチヒッターを務めますか。
 - [] この制度を利用したら履歴書に書いていますか。

「いいえ」と答えた場合：

- [] 過渡的雇用は、必要だと思いますか。
- [] 過渡的雇用のどんなところが魅力ですか。

一般就労について、お尋ねします。

- [] 現在、パート、アルバイト、正社員等一般企業の仕事についていますか。
- 「はい」と答えた場合：
- [] 仕事内容を教えてください。
 - [] 一週間の勤務日数と1日の勤務時間を教えてください。
 - [] 勤務年数を教えてください。
 - [] その仕事は、どのように見つけましたか。

就労支援サービスについてお尋ねします。

- [] 就職活動のとき、どのような援助が受けられますか。
- [] その他、必要と思う就労支援サービスがありましたら、お聞かせください。

(:)

質問3 メンバー、スタッフの関係について：

メンバーとスタッフの参加と協働がクラブハウスの生命です。

- [] 友好的で、対等な関係ですか。
- [] どのような時に、対等だと感じますか。
- [] メンバーとスタッフは、お互いに名前呼び合っていますか。
- [] 活動や仕事をどのように分かち合っていますか。
サン・マリーナの例として：朝のミーティングで情報を共有したり、
役割分担で仕事を分かち合っています。
- [] ミーティングには、メンバーならだれでも参加できますか。
- [] ミーティングでの役割の取り方や進め方を教えてください。
- [] スタッフ数は適切だと思いますか。
- (:)

質問4 ユニット活動以外の特別活動（プログラム）について：季節の行事や講演会など

- [] どのような特別活動（プログラム）に参加していますか。
サン・マリーナの例として
- 1) ハウス内の教育研修活動：自助グループ育成講座、服薬講座など
- 2) ハウス外の教育研修活動：海外のクラブハウス研修、外部の講演会・セミナー
- 3) 季節行事：ひな祭り、節分、お彼岸等
- 4) 夜間週末レク：ボウリング、ハイキング、カラオケ、ビーズ講座等
- [] 特別活動（プログラム）の内容は、どのように決めていますか。
- [] 医療相談や就労相談はありますか。

「はい」と答えた場合

- [] 月に何回ありますか。
- [] 相談員はどなたですか。

「いいえ」と答えた場合

- [] 専門の相談員が必要ですか。
- [] どのような相談を受けたいと思っていますか。

夜間・週末の社交レクリエーションプログラムについてお尋ねします。

- [] 夜間・週末の社交レクリエーションプログラムは必要だと思いますか。
- [] どのような社交レクリエーションプログラムに参加していますか。
- [] 企画や実施は、どのように行われていますか。
- (:)

質問5 国際交流について：クラブハウスは、世界中に30ヶ国、400ヶ所と広がっています。2年ごとに、世界クラブハウス会議が開催され、体験発表やクラブハウスの見学などを通して、国際交流を行っています。

- [] アジアクラブハウス会議を開催してほしいですか。（韓国、香港、シンガポール、日本）
- [] 他の国との交流を持ちたいですか。
- [] 海外のクラブハウスへ行きましたか。海外から訪問がありましたか。
具体的にお答えください。
- [] 世界クラブハウス会議に参加したいと思いませんか。
- (:)

質問6 クラブハウス（自分の施設名）全体について

- [] 自分は、クラブハウス（自分の施設名）の運営に役立っていると感じていますか。
- [] どのようなときに、自分が役立っていると感じますか。
- [] 利用していて満足ですか。楽しいですか。
- [] 交通の便はどうですか。

- [] 参加メンバーの方はみなさん友好的ですか。
- 入会（利用）についてお尋ねします。
- [] 入会（利用）のきっかけは何でしたか。
- [] 入会（利用）・更新手続きは簡単ですか。
- [] 入会（利用）にあたって、十分な情報提供がされましたか。
- [] 入会（利用）を決める前に、体験参加はできますか。
- [] 世界クラブハウス規約には、クラブハウスの安全を脅かす人は参加できないと明記されていますが、皆さんのところはどうか。
- [] 参加の日数など利用するためのルールが設けられていますか。
それともメンバーは自由に参加されていますか。
- [] メンバーになろうと思ったとき、どのような期待を持っていましたか。
- [] 施設は、快適に利用できますか。
- [] 施設のどんなところが気に入っていますか。
- (:)

質問7 友愛訪問活動について：入院したり、家に閉じこもってしまったメンバーへの支援活動

- [] 手紙やニュースを毎月送っていますか。
- [] 入院したメンバーのお見舞いに行っていますか。
- [] 電話で相談にのったりしていますか。
- [] 自分が閉じこもったりしている時、仲間の支えやあたたかな眼差しを感じていますか。ひとりぼっちじゃないと感じていますか。
- [] その他、どんな相互支援をしていますか。具体的にお聞かせください。
- (:)

質問8 住居プログラムについて

- [] 住居について、話し合うことがありますか。
- [] 理解のある不動産屋さんや民生委員などの方に相談にのっていただけますか。
- (:)

質問9 その他の質問

- [] あなたの身の回りに、クラブハウス（自分の施設名）以外にどんなサービスが必要ですか。具体的にお聞かせください。
- [] 地域との関係、交流は盛んですか。具体的にお聞かせください。
- [] その他、自由にお話ください。

以上でインタビューを終わります。長い時間、本当にありがとうございました。

平成 年 月 日

調査員名：



聞き取り調査風景



ピアステーションゆう

反省会

2. 調査の進め方

1. お互いに自己紹介をします。
この時、気分調べの要領で行うとよいでしょう。
(JHC 板橋では、朝のミーティングと帰りのミーティングで、メンバーとスタッフ全員で、ひとり 30 秒ずつの気分調べを行っています)
2. 調査の目的を伝えます。
3. 質問時間、休憩の取り方を確認します。
4. 質問にあたってのルール（マナー）を確認します。

お互いの信頼関係をつくるために

- 1) 調査の報告書は、本名でいいですか、匿名にしますか。
匿名の場合、イニシャルにしますか、ペンネームにしますか。
- 2) 答えたくないことには、パスする権利があります。
- 3) 批判や押し付けではなく、対等な仲間としてお互いの経験を尊重し合います。
- 4) 「私は・・・」という言い方で始めると、その人自身のかけがえのない体験を聞くことができます。
- 5) ひとりの人が話しているときは、割り込みをしません。
- 6) プライバシーには、配慮します。
記録されたくないことを話してしまった場合は、その場で注意してください。録音を消去します。また、最終的な報告集ができる前に、報告に載せていかどうかの了解を取ります。
- 7) 疑問に思ったことは、その場で確認し合います。
- 8) 言い足りなかったことや、取り消したいことがあったら、後日調整できます。
- 9) インタビューの写真を撮ってよろしいでしょうか。

私たちは、以上のルールを大切に、この調査を相互支援の場にしたいと願っています。

5. 質問する人とされる人が、お互いに話しやすい場所や座る位置など、丁寧に確認し合います。
6. 喫煙や飲料など、お互いの迷惑にならないように、確認し合ってマナーを守ります。
7. 録音の用意をします。
質問者と答える人の声がよく入るように、2人の真ん中にテープレコーダーを置きます。
録音されているかどうか、一度試してみて、それから本番に入ります。
録音に関しては、スタッフが助手をつとめます。
8. 時間をオーバーしないように、スタッフが時間係りをつとめます。
9. 質問票にそって、質問していきます。
十分に間をとって、余裕を持って答えていただきます。
10. 質問の時間配分に気をつけます。
全体をバランスよく質問できるように、時間係りと相談しながら進めてください。
11. 途中、気分が悪くなったりしたら、無理をしないで、充分休憩を取ってください。
12. 質問が終了したら、お互いに感謝の言葉で締めくくってください。
お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。
13. 皆さんの許可を得て、活動時の写真や全員で集合写真を撮らせていただければ幸いです。

3. 調査の準備

用意するもの

1. 名刺 ()
2. JHC 板橋会
 - 1) パンフレット ()
 - 2) ニュース風見鶏 ()
 - 3) 活動紹介ビデオ 「あなたの夢は何ですか」 ()
「人間ゆうゆう」 ()
3. サン・マリーナ
 - 1) パンフレット ()
 - 2) ニュース ()
 - 3) 活動紹介ビデオ 「サン・マリーナの活動」 ()
 - 4) ユーザー会議記録集 ()
4. 調査聞き取り用紙 ()
5. テープレコーダー 3台 ()
6. カセットテープ 120分を6本 ()
7. メモ用紙 ()
8. デジタルカメラ ()
9. お土産
 - 1) 赤塚のクッキー ()
 - 2) いずみのちぎり絵 ()
 - 3) 志村の布製品 ()



調査準備会議 サン・マリーナ 2003年7月～2003年10月

4. クラブハウス調査に参加しての感想と報告

当事者参加型調査研究の意義

JHC 板橋会サン・マリーナメンバー 菊池美砂穂

Part 1 : クラブハウス調査の主旨

私は、昨年のクラブハウス調査に調査員として、クラブハウスサン・マリーナの同僚のメンバー、スタッフと、明治学院大学の八木原律子さんと共に、‘参加協働’いたしました。

クラブハウス調査は、クラブハウスを立ち上げたいという人々、クラブハウスを立ち上げようとしている人々の事業所に訪問して、‘メンバーが調査員として、メンバーへインタビューする’といった形式でした。スタッフと八木原律子さんは、コーディネイター&マネジメントを行っていただきました。私は、今回、調査の一連の流れにほぼ関わりさせていただきました。

Part 2 : 2003年のコンサルテーション (クラブハウス認証)

2003年は、クラブハウスサン・マリーナが、世界クラブハウス連盟(本部: ニュー・ヨーク)からコンサルタントを迎え、コンサルテーション(注: サティフィケーションという表現を用いることもある)、クラブハウス規約36項目に照らし合わせながら、評価と提言を受けるといふ、大きな事業が控えていました。

その前段階のサン・マリーナの活動、サービスの振り返りを、メンバー自身がスタッフと共に行うという、大変、手間と根気のいる作業がありました。

Part 3 : クラブハウスモデルの相互支援&、教育、文化、調査、研究

クラブハウスモデルが、相互支援(メンバーがサービスを受ける側と提供する側の可変性を持つ)、メンバーシップとパートナーシップによって運営されるという主軸により貫かれたものです。そのなかにて、メンバー自身がサービスの振り返りと評価を行う、ということに重きを置かれています。

教育、文化、調査、研究という項目は、クラブハウスモデルにおいて重きを置かれていることの一つです。

Part 4 : クラブハウス調査のプロセスの重要性

その作業を行っていくなかにて、今回、クラブハウス調査に、私たち、メンバーが参加したことの意義は大きなものでした。調査項目を作っていくという作業は、経験あるメンバーは、新しいメンバーと共に、‘いっしょに’、クラブハウスの規約や、自分の参加していない活動について、そして、訪問させていただく事業所についての学習をいたしました。‘いっしょに’、学習する機会を今回改めて、違う視点から行うことが出来たのです。

Part 5 : 調査項目の作成と模擬実践

実際、調査する側、調査される側として、役割を交代し、模擬実践を何回か行いました。この作業により、調査項目の変更や補足、休憩時間を含む時間配分、質問の声かけの仕方、見落とし無きように、チェック項目を付けるなど、細かな配慮を加えていくことが出来たと思います。

Part 6 : いっしょに、能動的に、やる気のわくチーム作り

私が一連の流れにおいて気をつけたことは、私自身も含めて、メンバーがいかに‘能動

的に’このプログラムに参加しやすくするか、ということでした。メンバーの‘やる気のわくプログラム’を揃えるということも、クラブハウスモデルにとっては、重要な位置を締めているのです。私は経験あるメンバーの一人ですが、私の課題として、相手のペースを尊重しながら、声かけを行っていく、全体を観察しながら、‘いっしょに’、‘能動的に’、‘やる気のわくチーム’を作り、維持し、発展させていくことでした。私も、ぼちぼちとしたペースを維持することを心がけました。

自己有効感、自己肯定感を共に、‘いっしょに’、育てていくことでした。

Part 7：相互支援の成長の可変性、役割を交代する豊かさ

この意義は、相互支援の成長の可変性、‘役割を交代する豊かさ’を、経験あるメンバーも、新しいメンバーも、体験することの出来たものと思います。

Part 8：訪問先において

京都、仙台、奈良の三箇所を調査させていただきました。そのうち、私が参加いたしましたのは、京都、仙台です。調査協力をしてくださった方に、とてもたくさんのお話を聞けたことが、私はうれしく、幸いでした。さっき会ったばかりとは思えないほどに、うちとけて深いお話をお聞きし、また、出来たことを感謝しております。訪問先の事業所と、クラブハウスモデルとの共通点をまず探すことからはじめ、相違点も浮かんできたと思います。

Part 9：「さびしい」という気持ち

私の個人的感想ですが、パートナーがいないとか、情報を共有する機会がないとか、帰ってくる居場所がないという「さびしい」という気持ちが伝わる時が辛いことでした。さびしいって思う人が、‘ひとりぼっちにならない、させない’ために、クラブハウスはありたいと思います。

Part 10：満足度調査の経験

私は、以前、日本社会事業大学が行った、クラブハウスメンバーのサービスの満足度調査を経験しています。調査項目に対してメンバーが感じたこと、思ったこと、意見を述べ、調査の専門家に提言するといった流れでした。これはとても有意義なものを感じました。

あらゆることを会議において、メンバーは体験と経験に基づいた意見(参考意見でなく、運営に関わる実権あり)を、出し合うというのも、クラブハウスの特徴です。

満足度調査に似たもの、サービスの評価を、行政もクラブハウス以外にて、一時期試験的に行っていたと思いますが、やはり的外れな質問が多く、不快な思いをした経験がございます。

Part 11：コンサルテーション

サン・マリーナは、無事、認証を受けることが出来ました。サン・マリーナが受けたコンサルテーションは、ラルフ・ビルビィさんとデニス・ハーストさん、お二人のコンサルタントによる、プライバシーに配慮されたとても丁寧なインタビューによるものでした。デニス・ハーストさんは、メンバーだった方で世界クラブハウス連盟の面接を受けてスタッフになられた方です。デニスさんは、当事者スタッフでなく‘スタッフ’なのです。とても、職業人として素晴らしい方でした。日本において、‘当事者スタッフ’という言葉が一人歩きしている昨今ですが、クラブハウスのスタッフは業務の幅も広く深く知らない、経験していないと、出来ない仕事だと思いました。私は、するどい質問もたくさん

受けました。皆、きびしくもあたたかい、成長の機会を得て充実した4日間でした。

Part 12：訪問先の各事業所の方々へ

私たちが暖かく向かい入れていただきありがとうございました。

たくさんの不備、また、クラブハウスというサービスについての疑問点や、各事業所との相違点、戸惑いなど存在したと思います。お互いを知り、また、次なる成長の機会となりますことを願いたいと思います。

Part 13：日常活動によるバックアップ

サン・マリーナの日常活動によるバックアップ、特に、ランチに支えられ、クラブハウス調査という、仕事の幅を広げることが可能になりました。

Part 14：クラブハウスのスタッフの役割

クラブハウスのスタッフという仕事は、見守り介入をしつつ、メンバーの人としての可能性、可変性を伸ばしていくという役割を持ちます。‘名脇役’に支えられながら、メンバーは伸び伸びと仕事をさせていただきました。今回もそうですが、いつもありがとうございます。

Part 15：違う大変さ、同じ共感

先日の報告会において、知的障害の方や身体障害の方の大変さがあることがわかり、また、仲間同士によるインタビューによって、深いニーズに引き出すことが出来るのは同じだという共感を覚えました。ガイドヘルパーと支援費についてなど、生の体験を聞けてとても勉強になりました。

Part 16：当事者の感性と専門家の視点のパートナーシップ

当事者もお互いの自立度が違うので、当事者だからわかるだけでなく、当事者の感性と専門家の視点によって‘いっしょに’、パートナーシップによって、より豊かなもの、‘心ある連携’を作り上げていくことが出来ると、私は確信しております。

Part 17：当事者による当事者のニーズと満足度の調査の意義

今後もこのような調査に、私自身、参加いたしたいです。そして、たくさんの方が体験出来ることを願います。当事者のニーズ、満足度をきちんと評価するシステムは必要不可欠です。そして、このような調査研究に参加したい当事者もたくさんいると確信しております。

Part 18：最後に

今回の調査一連において、この機会をいただき、また、影ひなたに支えてくださった、八木原律子さんに深い感謝を表したいと思います。私たちが倒れ大変でしたが、本当によい体験をさせていただきました。



作成した調査用紙を使っのりハーサル
2003年10月 サン・マリーナにて